博士学位論文要旨

恋愛コミュニケーションプロセスに関する日本的研究

－ 現代の日本人男女はどのようにして交際相手と出会い、「付き合う関係」を構築するのか －

西南学院大学大学院 文学研究科英文学専攻 コミュニケーション学専修

友池 梨紗

第１章　序論

第１章では本論文の研究背景として日本コミュニケーション研究の現状を明らかにした上で西洋中心主義のコミュニケーション研究からの脱却と実学志向のコミュニケーション研究の追究の意義を説いた。

まず、日々の情報技術の発達によりコミュニケーションの形態に変化が見られる中、コミュニケーションに従事する人びとが「コミュニケーション」の重要性を理解しつつも、そのことばが指す意味を深く理解していないことを指摘した。次に、本論文のテーマを「恋愛コミュニケーションプロセス」に設定した背景として（１）インターネットの普及に伴って恋愛の競争化が活性化する中、恋愛格差が広がりつづけていることと、（２）仲人文化の衰退とコミュニティ内での出会いの縮小によって「(異性との) 出会いがない」、「どのようにコミュニケーションを図ったらよいか分からない」といった悩みを抱える未婚者男女が国内で増えている、という２点を挙げた。

また、欧米で提唱された理論・概念が無差別に起用されている実態を取り上げ、土着文化に根ざした研究の重要性を説いた。さらに本論文での「コミュニケーション」が指す定義を明らかにした上で、社会に還元される知見提供を目的とした実学志向のコミュニケーション研究を目指す旨を論じた。本章の最後には日本的恋愛コミュニケーションに着目することで期待される成果として（１）日本特有のコミュニケーション行動の知見が得られること、（２）机上の空論に留まらない実学志向を目指した研究が進められること、（３）コミュニケーション学の観点から恋愛研究を進めることで既存の恋愛研究では得られなかった視点を得ることができること、の３点を挙げた。

第２章　「恋愛」にまつわる先行研究概観

第２章では文学、心理学、社会学の３分野を中心に進められてきた国内の恋愛にまつわる先行研究を概観した上で、本研究の立ち位置を定めた。

まず、私たちが日常の中で何気なく使っている「恋愛」ということばとその概念がどこから生じ、どのような変遷を経て今ある形にたどり着いたのか文学の研究から紐解いた。次に、「恋愛」と「結婚」の結びつきに着目した先行研究を取り上げ、近年の日本では見合い結婚や職縁結婚の衰退から「出会いの経路」が縮小しており、多くの未婚者男女が「(異性との)出会いがない」と悩んでいる実態を示した。続けて「出会いの経路」が縮小している現代でどのような人が交際相手と出会えているのかを調査した研究に目を向け、現代の日本でも「自然な出会い」を理想の出会いだと考える未婚者の多いことを示した。また、「恋愛」ということばが指す意味は多方向に広がっており、現代の若者にとって「恋愛」はあってもなくてもよい「嗜好品」であるのと同時に「恋愛」の相手が実在する人に限定されない実態も示した。

このように「恋愛」の複雑性を示した上で交際を求める際には「コミュニケーション」が大きな鍵を握るという考えを示した。同時に、多くの人がコミュニケーションを「既存の関係の中で生じるもの」と捉える中、本論文では「人間関係」そのものが「コミュニケーションの産物」であると捉え、「人間関係を作り上げる人と人との相互作用の過程」に焦点を当てる必要がある旨を説いた。さらに、先行する恋愛研究で唯一プロセスとして焦点が当てられてきた「告白」にまつわる研究を紹介した上で日本人にとっての「告白」が大きな意味を持つことを示した。最後に、実際に人びとがコミュニケーション行動に従事する際に同じ文化の他者の行動を参考に規範に則った選択を行う人間心理を示し、日本人の間で共有されている規範が何であるのか探ることが求められると論じた。

以上、本章の先行研究概観から「恋愛」という概念は時代の流れに従って、そのあり方を随時変換させてきたことが明らかとなった。一方、男女が「付き合う関係」を構築するまでの過程に焦点を向けた際、「告白」という一点のコミュニケーション行動を除いて日本人男女がどのように関わり合っているかは明らかになっていないという課題が浮上した。この先行研究の不足点を念頭に置き、次章の「本研究の視点」で本論文の立ち位置を指し示す。

第３章　本研究の視点

第３章では「若者の恋愛離れが進んでいる」という言説を取り上げた上で現代の恋愛研究に求められるのは若者の恋愛離れに焦点を当てることでなく、若者の恋愛にまつわる実態を深堀りすることであると主張した。「恋愛」という状況で「出会いがない」または「どのように行動すればよいのか分からない」と、恋愛コミュニケーションのプロセスにまつわる悩みを抱える人が多い中で、その実態を調査する研究が不足していることは喫緊の課題であることを示した上で以下の問いを設定した。

問い：現代の日本人男女はどのようにして交際相手と出会い、「付き合う関係」を構築するのか。

本論文は「日本的恋愛コミュニケーションプロセスの探究」を第一の目的としているが、参考として西洋圏で提唱されている人間関係に関する理論およびモデル（社会的交換理論、社会的浸透理論、Knapp の階段モデル）を紹介した。その上で日本人の「出会い」から「付き合う関係」に至るまでの過程を調査する方向性を定めた。西洋発祥の理論や概念はその対象の多くが西洋人であることから「日本『特有』と言われているコミュニケーションの特徴を十分に説明することはできないかもしれない」という前提を踏まえてそのアイデアを参考にすることとした。

第４章　一次調査

第４章では上記の問いに対する答えを求めて半構造型インタビューを実施した。本調査ではスノーボールサンプリングを採択し、（１）20～30 代の社会人で（２）２年以内に交際経験（「付き合う」関係に至った経験）があり、（３）異性愛者である 13 名の男女による語りを元にデータ分析を進めた。本調査では参加者たちの語りの中に込められた意味を深堀りすることを目的に、SCAT の手法を用いて分析を進めた。

分析の結果、「出会いの経路」が縮小傾向にある現代でも本調査参加者たちは学校や街なか、街コンや合コン、マッチングアプリ、紹介などさまざまな方法で交際相手と出会っていたことが明らかとなった。さらに、交際相手との出会い方によってその後のコミュニケーションプロセスに変化が見られることが示唆された。中でも、相手との出会いが交際目的であった

のか否かがコミュニケーション行動の選択に変化をもたらしたことが示された。なお、交際を目的としない「偶発的出会い」の減少傾向に伴い、今後は交際を目的とした「自律的出会い」の需要が伸びる可能性があることが示された。ここでは、出会いによるコミュニケーション行動の具体例として関係初期段階の不確実性減少行動についても取り上げた。

一方で、出会いの変化に伴って関係構築時のコミュニケーション内容に変化が見られたものの、「付き合う関係」が構築されて関係が安定した後は出会い方に関係なく「付き合う関係」にふさわしいカップル行動が取られていることが示された。さらに先行研究でも取り上げた「告白」に焦点を当てて参加者たちの語りを紐解いたところ、本調査でも「付き合う関係」を構築する際の「告白」が儀礼的行為として認識されていることが示唆された。

本調査では Knapp のモデルを参考に参加者の「出会い」から「付き合う関係」に至るまでのコミュニケーションプロセスを追うことで出会いに基づくプロセスの変化を明らかにすることができた。しかし、二人のどのようなコミュニケーションが関係変化に貢献しているのかは定かにならなかった。そこで、二人の相互作用に焦点を当てた理論および概念を探究したところ「ターニングポイント」という概念が浮上した。「ターニングポイント」とは関係に変化をもたらす出来事を指し、シンボリック相互作用論的アプローチを取ると言われている。そこで続く二次調査ではシンボリック相互作用論的アプローチを取る「ターニングポイント」の観点から日本人男女の恋愛コミュニケーションプロセスを探究していくこととした。

第５章　二次調査

第５章では改めて西洋発祥の概念（「ターニングポイント」）を参考に「日本人男女の恋愛コミュニケーションプロセス」について調査することとし、一次調査とは異なる対象者に半構造型インタビューを実施した。本調査でもスノーボールサンプリングを採択し、（１）20 代以上の社会人で、（２）インタビュー実施時に交際中の（３）異性愛者、10 名の男女による語りを元にデータ分析を行った。本調査では参加者たちの語りからターニングポイントであると考えられるコードを生成し、生成されたコード同士をグループ化していく形で本調査参加者たちが経験したターニングポイントを割り出した。

結果、25 のターニングポイントが抽出され、それらを４つのカテゴリー（「相互交流ターニングポイント」、「個人内認識ターニングポイント」、「第三者との関わりターニングポイント」、「環境的ターニングポイント」）に分類し、最終的に交際前と交際開始後の２つに分類した。各ターニングポイントの具体的な説明は結果部分に示している。

考察部分では、シンボリック相互作用論的アプローチがもたらした視点について言及した上で再び「出会い」に関する議論に立ち返り、近年の出会いの多様化について論じた。また、不確実性減少行動についても再検討を試み、不確実性減少理論と本調査結果の一致する点、反対に相違する点を挙げていった。さらにインターネットの普及によってオンラインコミュニケーションを視野にいれた調査の必要性が高まっていること、改めて日本人にとって「告白」は最大のターニングポイントとして認識されていること、そして「付き合う関係」は二人の間だけで完結せずに第三者の影響を強く受けていることについて議論した。

第６章　総合考察

第６章では一次・二次調査で導き出された結果を元に本論文の問いであった「現代の日本人男女はどのようにして交際相手と出会い、『付き合う関係』を構築するのか」に立ち返り、恋愛コミュニケーションプロセスの中に見られる日本的コミュニケーションの特徴を考察していった。

まず、出会い方によってその後のコミュニケーションプロセスに変化が見られたことから今後恋愛コミュニケーションプロセスについて調査をすすめる際には「二人がどのようにして出会ったのか」を抜きに深い考察はできないと考えた。とりわけ「縁」を大事にする日本人は相手との出会いに「縁」を見出し、相手との関係の調和を保つために出会いに則したコミュニケーション行動を選択すると考えた。また、「自律的出会い」の需要が高まる現代では「自律的出会い」に焦点を当てた研究が必要であることも指摘した。

次に、二人の男女が出会ったあと、さまざまな相互作用が交わされて「付き合う関係」が構築されると示唆されたことから「付き合う」までには長い道のりがあると考えた。なお、日本人が「気」の概念を大事にするという先行調査から出会い方に関係なく「気が合う」者同士で「付き合う関係」が構築されるのが理想とされているのではないかと言及した。

さらに本調査でも重要概念として取り上げられた「告白」に目を向け、日本人にとって「告白」は恋愛コミュニケーションプロセスの中の「儀式」のようなものであり、節目を大切にする日本人にとっては不可欠な行為であることを示した。また、相手との間柄を考慮した上で相手とのコミュニケーションスタイルを選択する日本人にとって「告白」によって生じるのは「気のおけない関係」であり、だからこそ遠慮なコミュニケーションを取ることで有名な日本人も「付き合う関係」においては自分の求めることをはっきり伝えるようになるのだろうと結論づけた。

第７章　結論

本論文では「『日本人研究者による日本人を対象とした』対人コミュニケーション理論や概念構築の試み」を目指して日本人の恋愛コミュニケーションプロセスを調査した。二度にわたる質的調査の結果、二人の男女が出会ってから「付き合う関係」に至るまで、そして至った後に見られるコミュニケーション行動には西洋的視点からは明らかにならない点が多く見受けられた。また、コミュニケーション学の観点から調査を進めることによって現代の日本では交際につながる「出会い」の多様化が進んでいることや二人が出会ってから「付き合う関係」に至るまでの間にはさまざまな相互作用が関連し合っていることが示唆された。本章では最後に本研究の残された課題と将来の展望について言及した。